学術

特集 フランス革命とその前

「パリアの反乱」を主軸に、フロラ・トリスタンの生涯を辿る

社会のマージナルな立場から社会改革を推進しようとした彼女の思想を十二分に伝える

村田京子

ゲルハルト・レオ 著
小杉隆芳 訳
▶なぜ彼女は革命家になったのか
叛逆者フロラ・トリスタンの生涯
8・1刊 四六判320頁 本体3300円
法政大学出版局

一九世紀フランスにおいて、男性優位の結婚制度への異議申し立てを行ったジョルジュ・サンドが、フェミニズムの先駆者として有名である。サンドは共和主義思想を信奉し、民衆が蜂起した一八四八年の二月革命では革命政府のブレーンとして大きな役割を果たした。しかし当時、サンドと同等の知名度を持ち、女性と労働者階級の解放を訴えた女性作家がもう一人存在していた。それがフロラ・トリスタンである。彼女は二月革命以降、忘れられた存在となり、歴史の中に埋もれていたが、一九二九年にピュエシュによって彼女の業績が発掘され、さらに一九七〇年代には、フェミニズムの観点から彼女の思想を分析したドザンティなどによって、脚光を浴びるようになった。本書の著者ゲルハルト・レオもその流れに与している。

本書の原題を直訳すれば、『フロラ・トリスタン――パリアの反抗』となる。「パリア」はインドのカースト制度外の最下層の人々を指すが、トリスタン自らが「パリア」と名乗っていた。それは、放蕩者の夫から逃れて実家に戻った時、自分の意志で家を飛び出す女は、社会の外にあるパリアだと伯父から非難されたことに由来する。トリスタンの特色は、自らの置かれた状態を個人の問題に還元するのではなく、ナポレオン民法典によって社会的・政治的・経済的権利を剥奪された女性全体の問題と捉え、彼女が「真のパリア」とみなす女性の解放を目指した点にある。さらに彼女は、貧困に苦しむ労働者たちも「パリア」とみなし、労働者階級の解放を目指すようになる。それと同時に、隷属状態に置かれた者には反抗する権利があることを一貫して主張している。本書は、こうした「パリアの反抗」を主軸にして、フロラ・トリスタンの生涯を辿る試みとなっている。

本書ではまず、ペルーの名門貴族の父とフランス人の母との間に生まれたフロラが父の死後、貧困に陥って彩色工となり、雇い主のアンドレ・シャザルとの不幸な結婚に至る過程が描かれている。夫から逃げる中で、彼女は父親の遺産分与を求めてペルーの叔父ピオを訪ねることを決意する。数か月に及ぶ過酷な船旅の後に、フロラは叔父と対面するが、私生児であるという理由で遺産はもらえず、彼から支給されたのはわずかな年金だけであった。しかし、彼女はペルー滞在中に現地の人々の習慣や生活を観察し、奴隷制の実態を知り、内戦にも立ち会ってその詳細を克明にメモしていた。帰国後に、それをまとめて本にしたのが『ある女パリアの遍歴』である。本書の特徴は「自伝的な語り口、ありのままの現実に基づいて成されたルポルタージュ」であり、南米の異国ペルーの旅行記はフランスで大評判になり、フロラはその美貌と相まって社交界の寵児となる。

トリスタンはそれ以前にもサン＝シモン主義やフーリエの思想に影響を受けていたが、さらにイギリスのチャーチスト運動やロバート・オウエンの思想にも共感を抱き、社会主義者となっていた。したがって、彼女が次に企てたのは、資本主義の発展国イギリスにおける労働者階級の悲惨な実態を調査することであった。彼女はロンドンの貧困地区や売春宿にも足を踏み入れ、その調査結果をまとめたのが『ロンドン散策』で、イギリスの労働者たちに反乱を促す過激なものであった。帰国してからの彼女の関心は、フランスの労働者階級に向かい、労働者自らが職種の違いや国境を越えて連帯し、相互扶助の組織を構築すべきだと主張して小冊子『労働者連合』を発行している。それは、マルクス、エンゲルスの『共産党宣言』に先立つ革新的な考えであった。彼女は、労働者たちに直接呼びかけるためにフランス各地を巡る途中で、四一歳の若さで病死してしまう。

ゲルハルト・レオは、フロラ・トリスタンの波乱に満ちた生涯を、彼女の著作や日記、手紙を丹念に読み込んで描いただけではなく、裁判記録や当時の新聞・雑誌の記事、報告書など客観的な資料に基づいて彼女の思想を裏付けている。ただ、夫による銃撃や、彼女を危険思想の持ち主とみなす警察による監視にも拘わらず、自らの信念を曲げない彼女の不屈の精神を強調するあまり、彼女の欠点（短気で怒りっぽく、傲慢とも目されたこと。感傷的な文章に陥りやすいこと）には触れていない（フロラの「反抗」への作者の強い思い入れは、ポーランド系ユダヤ人で、第二次世界大戦の折にレジスタンス運動に加わった彼自身の経験と無縁ではないだろう）。また、トリスタンの女性解放思想の具体的内容にはあまり言及されず、少し物足りなさを感じる。しかし、社会のマージナルな立場から社会改革を推進しようとしたトリスタンの特異性やその思想を十二分に伝える本書は、女性差別や貧困問題がいまだに解決できていない今日においても、示唆に富む内容を含んでいる。トリスタンの著作の翻訳書（『ペルー旅行記』『ロンドン散策』『メフィス』）と併せ読むことをお薦めする。

（大阪府立大学名誉教授）

思想

現代と旧時代のあわいにある汽水域、「特権的」な十八世紀

ミシェル・ドゥロン 著
鈴木球子 訳
▶アンシャン・レジームの放蕩と
繊細さの原則